

道元禪師と外道(二)

——数論について——

下室 覚 道

道元禪師の著述における数論説は『永平広録』第五402上堂にある。これは荊溪湛然(711-782)の『止観輔行伝弘決』卷一〇此一(大正四六・四三四中一下)からの引用であるが、周知の如く『弘決』は天台大師智顛(538-597)の『摩訶止観』の註釈書である。『摩訶止観』卷一〇(大正四六・三三二中)に「仏法外の外道」「附仏法の外道」「学仏法の外道」の三種外道を挙げ、そのうち「仏法外の外道」を明かす箇所は「二外外道。本源有三。一迦毘羅外道此翻黃頭。計因中有果。二漚樓僧法此翻休暇。計因中無果。三勤沙婆此翻苦行。計因中亦有果亦無果。」と示し、仏法と関係がない外道の本源には、迦毘羅外道、漚樓僧法、三勤沙婆の三種あり、このうち第一の迦毘羅外道(Kapila)が数論学派の祖であり、因の中に果がある(因中有果)を説いたことが記されている。また、『弘決』卷五之五(大正四六・三二四上)にも二五諦に闕説する箇所があり、我を想定することによって撥無因果に陥ることが示されている。

本稿は、262上堂すなわち『弘決』の数論説を中心として、『涅槃経』卷三九(大正二二・五九三上)や『大智度論』卷七〇(大正二五・五四六下)にみられる数論の諸説を対比しつつ、筆者なりに二五原理の展開順序、中有、因中有果、解脱とその方法、八万劫という項目を立て、道元禪師の捉え方を考察するものである。

一 二五原理の展開順序

数論は独存たる靈我(人我 Purusa)と世界の根源である原質(Prakriti)との二元論を説き、この原質が転変して世界と身心が生じるといふ転変説(parinama-vada)を説く。この転変の順序に異同があり、本田恵氏は「サーンキヤ派に於ける諸原理の展開」(『中村元博士還暦記念論集・インド思想と仏教』昭和四八年、春秋社)において明らかにしている。『永平広録』が引用した『弘決』における転開順序は、世性↓覚↓我心↓五塵↓五大↓一一根である。この順序は何から影響を受けた

のであろうか。石島尚雄氏は「永平広録の引用に関する一考察—止観弘決をめぐる—」（『宗学研究』二七号）の論攷において『金七十論』を要約して引用したものと述べられているが、展開順序の面からみて『大智度論』ではないかと考えられる。『大智度論』には、世性↓覚↓我↓五微塵↓五大↓五根という展開を示している。

二 中有について

筆者は「道元禪師の中有観について」（『曹洞宗研究員紀要』二九号）において道元禪師の中有観に關し、特に『俱舍論』との比較を通じて若干の考察を試みた。拙稿では、『正法眼藏』のみを取り上げたのであるが、この402上堂の教論說中にも「中陰」という言葉を見出すことができる。それは二五諦を説明する箇所「但見最初中陰初起。以宿命力恒憶想之。名為冥諦。亦云世性。謂世間衆生由冥初而有、即世間本性也。亦日自然。無所從故。從此生覺。亦名為大、即是中陰識也。」とあって、覺（大）を中陰の識とするのである。先の展開順序もそうであったが、『大智度論』においても「覺即是中陰識」とあり、『弘決』の記述と一致する。本田氏によれば、覺 (buddhi) のみを中陰識と呼ぶことは大きな特徴であるという。道元禪師は中有を認め、輪廻を認めているが、その輪廻主体なるものを身心一如なるものとされる。教論說におけ

る覺を中有と見なすことは認められていたのかもしれない。すなわち、『教論頌』三九偈には、微細「身」は永続であり父母所生身は消滅することが記されており、父母所生の粗大な身体は捨て去られるが、微細身 (sūksma-sarira) は常住であり、輪廻の主体とされるのである。また、微細身は細相 (sīma) と同じであるが、細相は微細身なしには存在しないとも記されている（『教論頌』第四〇偈）。仏教の中有と教論の微細身との差異に關して、小川宏氏は「中有の考察」（『智山学報』三九号）において「仏教の中有は死有と生有とを結ぶ作用はしても、生有即ち妊娠の時に消滅するのであり、永遠の継続性は持たぬのである。この点より見て、仏教の中有は教論派の微細身とは異質のものであり、…と述べ、仏教の中有は継続性はなく常住なる教論のそれとは異なるとされている。

三 因中有果について

道元禪師が外道としての教論說をどれほど意識していたかは分からないが、「徧界我有は、外道の邪見なり。」（「仏性」一卷一五頁）という中、「徧界我有」という説は教論の基本的思想である。『教論頌』第一〇偈には、顕現 (vyākā) は遍在しないが、未顕現 (avyākā) は正反対であることが示されており、根本原質たる未顕現すなわち我が徧界に存在することを主張するものである。また、この第一〇偈から「因中有果」

説という教論説を確認できる。「因中有果」説について村上真完氏は『サーンキヤの哲学』（一九八二年、平楽寺書店）において「果は發生以前においても因中にすでに有るといふ主張、すなわち因中有果宗、またものが生ずるといふことはありえず、本来あったものが衆縁によつて顕れてくるのだという主張」と述べている。また、因果の常・無常の問題であるが、『涅槃經』には教論説として二五原理を示した後、「因常果無常」が説かれており、仏教は「因無常果常 (rgu ni mi rtag, bras bu ni rtag)」であると批判している。つまり、仏教においては因なる修行は無常であり、その結果としての涅槃は常であり、涅槃を實態として捉えているのである。道元禪師は因中という言葉を次の箇所用いられている。①諸仏は果上なり、因中の聴法をいふにあらず。」（『行仏威儀』一卷七三頁）と②「弁仏、といふは、ほとけの因中・果上の功德を、念ずることあきらかなるなり。」（『出家功德』二卷二八七頁）とである。因中つまり修行においてと、果上つまり悟りを得た状態との二つの位が示されている。これは「証上の修」や「修証一如」の問題と絡んでくるし、①と②は矛盾しているようにも思われる。今後の課題とする。因果に関して道元禪師は、『三時業』（二卷四〇九頁）に「まづ因果を撥無し、仏法僧を毀諦し、三世および解脱を撥無する、ともにこれ邪見なり。」と示し、因果を撥無することを戒められている。同類の文は

『發菩提心』（二卷三四〇頁）、『四禪比丘』（二卷四二六頁）にもある。因果を撥無することは解脱を撥無することになるという。教論も解脱を説くが異なる点は、因果を認めない「我」という実体を認める点である。村上真完氏は「原質から二十三原理が展開して、人間の身心ならびに世界が出来る、というのであるが、（中略）因果、転変は靈我に關係がない。」と述べ、靈我の独存が因果に關係ないことを示している。しかし、先に『涅槃經』に「因無常果常」が説かれ涅槃が常住とされることをみたが、教論で説かれる靈我の独存は解脱や涅槃に相当するものであり、仏教と共通する。

四 解脱とその方法

今西順吉氏は「サーンキヤ（哲学）とヨーガ（実修）」（『岩波講座第五卷・東洋思想・インド思想』一九八八年、岩波書店）において、「眞の解決すなわち解脱に到達するためには、二元の完全な分離がなければならない。それをもたらすのが解脱知であり、それは二元が完全に異質なものであるという區別知である。この知を獲得したならば、根本原質に対するあらゆる執着・欲望が断ち切られて、純粹精神はそれ自身の本来の姿において存在し、根本原質は現象世界を掃滅せしめて、その働きを停止する。」と述べている。つまり、「知によつて解脱 (apavarga) がある」（『教論頌』第四四偈）のである。靈

我と原質との弁別知により解脱する方法として教論の修行者は「靈我は原質とその所産たる身心とは異なる」ことを修習(abyāsa)するのである。教論では六行観という観法が行じられるという。この弁別知に対して仏教側から反論がなされた。清弁は『中観心論』に、女と男が別々であることを見ても解脱しないように、原質と靈我とは別々であると見終わっても、妄想があるから解脱しないとして批判している。道元禪師も教論の如く弁別知の重要性を説くが、それは正邪の区別であり、妄想を取り扱う方向においてであり教論のそれとは異なると思われる。

ところで、解脱するとうなるのか。村上氏は「解脱は靈我と原質とを区別して、靈我を自覚することによって、最後に原質をはなれ、本来独立自存なる靈我に帰することであり、独存(karika)といわれる。」と述べ、靈我の独存が成立し、本来の姿になるという。道元禪師は解脱を認めているが、微細身が減することではなく、生死即涅槃を説かれている。

五 八万劫について

先に知によつて解脱が生ずることが知られたが、教論の修行者達は宿命智力によつて八万劫を見ることができるのである。『弘決』に「過八万劫前、冥然不知。」とあり、八万劫以前は知らない、つまり、八万劫迄は知りえるのである。『大

智度論』にも「得禪者宿命智力乃見八万劫事。過是已往不復能知。」とあって、禪者は宿命智力をもつて八万劫の事を見ることができるとある。道元禪師は、「八万劫」というタームを数力所使用されている。「阿羅漢」には「八万劫の前後を論ずべからず、抉出目睛の力量を参学すべし。」(二巻四〇五頁)と示し、また、「供養諸仏」には「かくのごとくの邪見は、たとひ八万劫をしるといふとも、いまだ本劫本見、末劫末見ののがれず、…」(二巻三六一頁)と示し、たとえ八万劫を知っている者でさえ、仏法からみれば未だ足らないものであり諸法実相を知らない者であるとされる。その他、「深信因果」にも「憐れむべし、たとひ一千生、一万生をしるとも、必ずしも仏法なるべからず。外道、すでに八万劫をしる、いまだ仏法とせず。」(二巻三九〇頁)とあって、外道でさえも八万劫を知る、それに比べて野狐が五百生を知っているからといってもたいしたことではないのである。八万劫を知ることには道元禪師にとっては、三世を知らない孔子や老子、或いは五百生を知る野狐よりも評価されるが、それでも仏法とは隔たることを示す場合に用いられている。

(キーワード) 微細身、因中有果、因中、果上、弁別知、八万劫
(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員)